

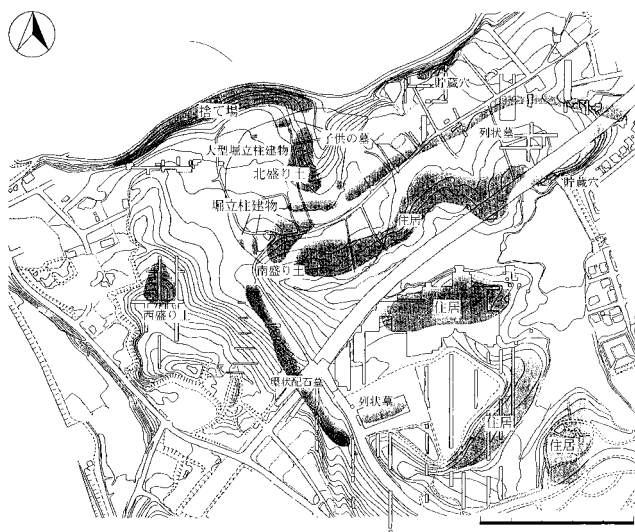
縄文時代中期

畠山昇

当センター設立以降の20年間に県教育委員会が調査した遺跡のうち、中期の土器片が出土している遺跡数は約120遺跡に上るが、そのうち遺構が発見されたものに限ると約50遺跡である。それらのうち、おもな調査例を地域ごとに見てみる。

津軽地方では、青森市三内(2)遺跡(現在は国史跡三内遺跡)、三内丸山(6)遺跡、今別町山崎遺跡(中期中葉～末葉)、平館村尻高(2)・(3)遺跡(中期中葉)、深浦町津山遺跡(前期末～中期初頭)、五所川原市隈無(1)・(6)遺跡、鯉ヶ沢町餅ノ沢遺跡等の集落跡が調査された。このうち、青森市三内丸山遺跡は、平成4～6年度に県営野球場建設事業に伴って当センターが調査を行ったが、おびただしい数の遺構や遺物が発見されたことから、県は遺跡の保存・整備へと軌道修正を行った。そして平成7年度からは三内丸山遺跡対策室が、遺跡の全体像解明のための学術調査を継続して行っており、平成9年には国史跡になった。これまでの調査から、前期中頃から中期終末にかけての長期間にわたって営まれた遺跡であり、中期後半に最も繁栄し集落が拡大したことが知られる。中期に相当する検出遺構としては、多数の竪穴住居跡のほか、掘立柱建物跡、土坑墓群、粘土採掘坑、埋設土器遺構、道路跡、大規模な遺物廃棄ブロック(盛土遺構)等が発見され、各遺構が整然と定められた区域に配置されていたことから、計画性をもった集落経営がなされていたと考えられている。また、考古学だけでなく他分野の研究者との連携によって各種の調査・研究が進められており、多くの貴重な成果を得ている。調査の進展によって縄文社会の実像に迫ることができることが期待される遺跡でもある。この三内丸山遺跡との関連で注目される遺跡に平成9年～11年に調査された三内丸山(6)遺跡がある。

三内丸山遺跡の南東約1.5kmの場所に位置し、中期中葉と後期前葉を中心に営まれた遺跡である。住居跡や掘立柱建物跡、土坑などの遺構や遺物が多数発見されており、中期に関する調査事例にも貴重なものがある。たとえば、中葉期の住居跡からアスファルト塊が出土したことは、縄文時代におけるアスファルト利用を考える上でも貴重な事例といえる。また、餅ノ沢遺跡は前期から後期にかけての遺跡であるが、住居跡6軒、石囲炉25基、配石遺構10基、石棺墓4基、埋設土器5基、土坑39基、遺物包含層1カ所、捨て場2カ所等の遺構が発見された。住居跡のうち1軒は前期末葉、他は中期後半のものと推定され、大型住居跡が3軒ある。多数の土器・石器とともに各種の土・石製品も多数出土したが、特に注目される遺物に



縄文時代中期中頃(約4500年前)の三内丸山集落の様子
(縄文シンポジウム'99「検証 三内丸山遺跡」資料)

中期初頭のヒスイ末製品や中期末葉の赤色顔料入りの把手付注口土器や人面付き注口土器がある。

三八地方では、八戸市葦窪遺跡（中期末葉）、八戸市牛ヶ沢（3）遺跡（中期末葉）、階上町野場（5）遺跡（中期後葉～後期初頭）、五戸町上蛇沢（2）遺跡、三戸町泉山遺跡、福地村館野遺跡（前期末葉～中期中葉）、八戸市笹ノ沢（3）遺跡等の集落跡が調査された。とくに、平成10・11年に調査した八戸市笹ノ沢（3）遺跡は、中期初頭期の集落跡であり住居跡15軒、土坑194基、焼土跡12基、捨て場2カ所と多数の小ピットが発見された。当該時期の集落跡の調査例が少ないことに加え、ほぼ単一の時期の集落跡であることから、良好な資料となる（平成13年刊行予定）。

上北・下北地方では、六ヶ所村大石平遺跡Ⅱ区（中期末葉）、弥栄平（1）遺跡（中期末葉～後期初頭）、上尾駸（2）遺跡、富ノ沢（2）遺跡（中期後半）、幸畑（7）遺跡（中期後葉）、野辺地町槻ノ木（1）遺跡（中期初頭が主体）、川内町熊ヶ平遺跡（前期末～中期前葉）等の集落跡が調査された。とくに、六ヶ所村ではむつ小川原開発事業に関連して多数の遺跡が調査され、多くの成果を得ることができた。このうち、平成元年と2年に当センターが行った富ノ沢（2）遺跡A地区では、中期の住居跡約400軒、掘立柱建物跡9棟、配石遺構4基、屋外炉9基、埋設土器2基、土坑698基、多数の小ピット群が検出された。円筒上層C式から大木10式併行期まで長期間にわたって営まれた遺跡であり、中期中葉と後葉の時期では遺構の配置に相違が見られることが判明している。また、平成元年に県文化課が行った富ノ沢（2）遺跡C地区では、中期中葉から末葉にかけての住居跡79軒以上、土坑179基、炉跡3基が発見されているが、主体となる時期は中期末葉（大木10式併行期）であり、当該時期の大規模な集落跡である。

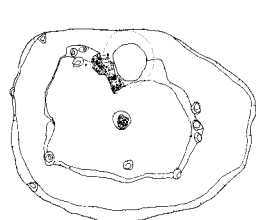
竪穴住居跡

昭和55年以降の県教育委員会が行った調査では、中期に属する住居跡が検出された遺跡数は約30遺跡近くあり、住居跡の件数も総数1,000軒以上が発見されている。この数は縄文時代を通じて最多であるが、なかでも、国内有数の集落跡である六ヶ所村富ノ沢（2）遺跡で約500軒、青森市三内丸山遺跡でも500軒以上（実数不明）の発見例が知られ、この二つの遺跡で検出数の大半を占めている。これらのうち、所属時期が明確なものについて見ると、円筒上層a～c式期のものは少なく、円筒上層d式期以降のものが圧倒的に多い。それらを対象に、中期前半と後半について大まかな変遷をしてみる。

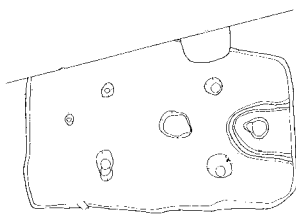
中期前半（円筒上層期）の住居跡は、平面形が円形や楕円形、隅丸（長）方形の住居が一般的であり、直径3m前後の小型のものから直径5m前後の一般的な大きさの住居に混じって、長軸が10m～30mクラスのロングハウスと呼ばれる大型住居跡も多く発見されている。炉は中央に設置される場合が一般的で、地床炉が最も多い。このほかに土器埋設炉や小竪穴炉や粘土囲炉（周提炉）、粘土囲竪穴炉などが見られる場合も多く、ごく少数ではあるが石囲炉が見られる例もある。また、住居の長軸壁に「特殊施設」と呼ばれる付属施設がつくられる例も多い。

中期後半になると、東北南部に栄えていた大木式土器文化の北上に伴って住居跡の形態や構造にも徐々に変化が現れてくるが、榎林式期では、まだ前代の伝統が色濃く残っており、大型住居跡も多く発見されている。次の最花式期になると、住居跡の平面形は隅丸（長）方形のものは徐々に少なくなり、円形・楕円形のものが多くなる傾向にある。そして、終末期では円形・楕円形のもの卓越する。炉は壁際に偏在する例が一般的で、炉の形態には、地床炉・石囲炉・土器片敷石囲炉・土器片囲炉等があるが、最花式期以降では石囲炉の占める比率が高くなって、複式炉も多く見られるようになる。

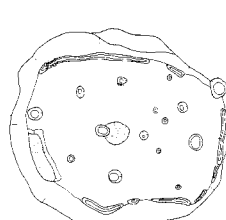
また、特殊施設は最花式期にも見られるが、大木10式期では見られなくなるようである。



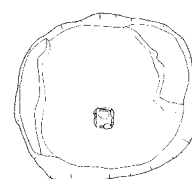
上層 a 式期(熊ヶ平遺跡)



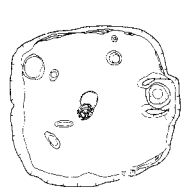
上層 c 式期(富ノ沢(2)遺跡)



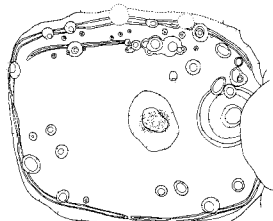
上層 d 式期(富ノ沢(2)遺跡)



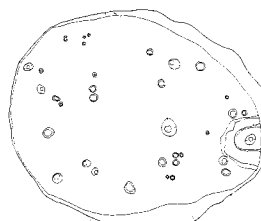
上層 d 式期(山崎遺跡)



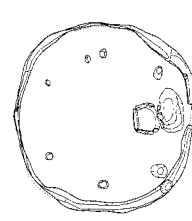
上層 c 式期(近野遺跡)



榎林式期(富ノ沢(2)遺跡)



最花式期(富ノ沢(2)遺跡)



大木 10 式平行期(弥栄平(1)遺跡)

墓

中期の墓の調査例は、泉山遺跡、槻ノ木遺跡、上蛇沢(2)遺跡等各地の遺跡でも発見されているが、とくに六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡や青森市三内丸山遺跡で多数検出されている。富ノ沢(2)遺跡では、環状集落の内外に205基の土坑墓が検出され、これらは四つの小墓域を形成しているという^(注1)。三内丸山遺跡では、成人用の土坑墓群や胎児ないしは小児用の埋設土器(土器棺墓)群が整然と定められた区域に設けられて多数発見された。成人用の土坑墓は集落の中心部から東へ420mにも及ぶ二列の土坑墓列のほかに、西南へ延びる列状に配置された土坑墓が道路跡とともに約180m確認されている。その中には、環状配石を伴う土坑墓も発見され、そのうちの1基は木槨のような構造であったらしいことも最近の調査から分かってきた。なお、配石を伴う土坑墓の例としては、野場(5)遺跡や槻ノ木(1)遺跡等でも発見されている。野場(5)遺跡では配石遺構が20基検出され、そのうちの5基の配石下部には土坑が伴う例が知られる。また、このうちの2基はフラスコ状土坑であり、土坑墓に転用された例と考えられる。

一般に土坑墓には副葬品が見られる場合と見られない場合があるが、前者にはヒスイの玉、石笛、石鏃、異形石器、石冠、敲磨器類、石皿等が副葬された例がある。こうした土坑墓の副葬品の保有率や希少価値の高い遺物の副葬例などから、中期中葉以降に社会的不平等が徐々に広がってくる現象が見られることも、最近の研究から指摘されるようになった^(注2)。また、後期初頭には石棺墓が出現することが知られるが、当センターで調査した餅ノ沢遺跡では4基の石棺墓が検出され、中期末葉にまで遡る可能性が強いという。さらに、脂肪酸分析の結果から、1基はヒトの遺体を直接埋葬した可能性が、もう1基はヒトの骨のみを埋葬した可能性が指摘されており、従来考えられてきた甕棺等への再葬を前提とした一次埋葬施設という捉え方に一石を投じる結果となった。

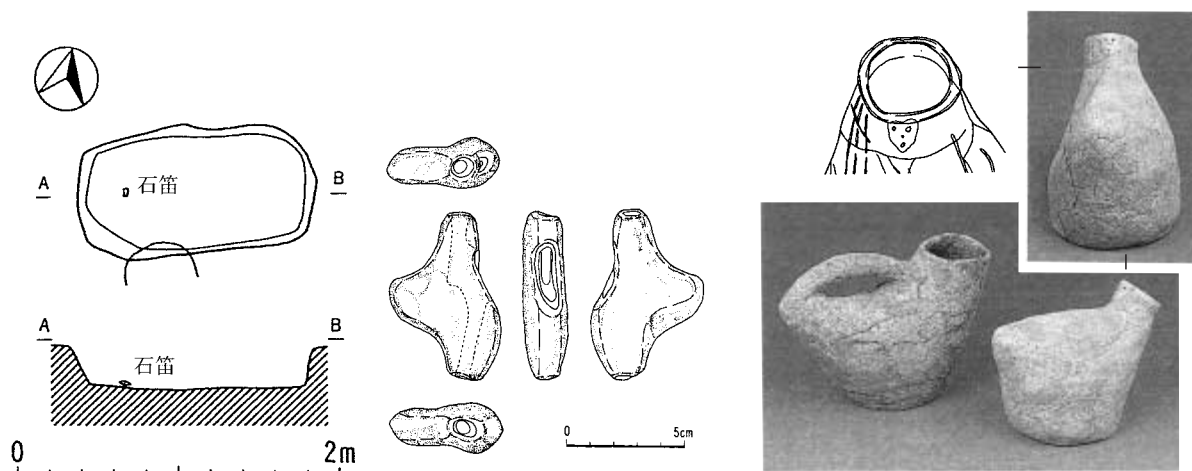
なお、土坑墓から人骨が発見された例は少なく、館野遺跡、泉山遺跡、十和田市明戸遺跡、八戸市松ヶ崎遺跡等の例が知られる程度である。このうち、八戸市教育委員会が調査した松ヶ崎遺跡では、住居跡床面から人骨が横臥伸展の状態で出土したことが注目される。住居廃絶後の竪穴内部を墓とし

て再利用した廃屋墓の可能性が考えられているが、中期後半の埋葬形態の一つとして貴重な事例である。

出土遺物

土器や石器以外にも土偶を初めとした祭祀に関連した遺物や各種の装飾品など、土・石製品が多数出土するようになるのも中期の特色の一つである。それらの多くは拠点集落とされる遺跡で出土する例が多く、三内丸山遺跡や富ノ沢(2)遺跡などから、土偶、垂飾品、玉、耳栓、キノコ形・三角形土製品、石棒、石刀、岩偶、ヒスイ製大珠、青竜刀形石器、玦状耳飾り、コハク、石笛、骨角器等各種の土・石製品のほか、多数の動植物遺体の出土が知られる。ヒスイ(新潟県)やコハク(岩手県)、黒曜石(北海道・秋田県・岩手県・山形県・長野県)、アスファルト(秋田県?)など他地域から運び込まれたものも多数あり、遠方との活発な交流・交易が行われてきたことが、次第に分かるようになってきた。また、玦状耳飾りは前期・中期に見られ、大陸との関係で注目される遺物でもある。

人面付土器は中期中葉以降に多く見られるようになるが、最近では餅ノ沢遺跡の人面付注口土器の出土例がある。器内面には赤色顔料の付着が見られ、赤色顔料の入った把手付注口土器と共に、葬送に関連した遺物と考えられている。また、三内丸山(6)遺跡の石鏃などの着柄に使用したと考えられるアスファルト塊、富ノ沢(2)遺跡の石笛なども全国的にも類例が少ないことから貴重な発見である。



土坑墓と副葬された石笛(富ノ沢(2)遺跡)

赤面顔料入注口土器・
人面付注口土器(餅ノ沢遺跡)

(青森県埋蔵文化財調査センター文化財保護主幹)